

第22回国際応用心理学会議管見

正 田 亘*

IMPRESSIONS OF THE 22nd MEETING OF INTERNATIONAL ASSOCIATION OF APPLIED PSYCHOLOGY

Wataru MASADA

序 奏

「さいころじすと」No. 18 (1987年10月)に、「第22回国際応用心理学会議のご案内」の記事が掲載された。

この号には三隅二不二教授の「国際応用心理学会大会に参加して——エルサレムにおいて——」の記事ものっていた。この中では、第21回大会がイスラエルにおいて開催され、日本からの参加者が30名弱であったこと、次回の大会が従来の欧米中心の大会方式からアジア・環太平洋の視座から全地球の心の問題を考え直す絶好の場となるべきことなどが熱っぽく語られている。日本からの参加者が28名であったとはあまりにも少ないが、これは当時のイスラエルの政治情勢が非常に不安定であり、多くの人が参加を躊躇したためとおもわれる。

さて、「さいころじすと」No. 18が発行される2年前、1985年7月、第22回国際応用心理学会議準備会世話人代表三隅二不二（国際応用心理学会理事・大阪大学人間科学部教授）の名前で準備委員会結成につき、準備委員会委員を引受けて欲しいとの文書が各学会の理事、役員に届いた。この準備委員会は本明寛日本心理学会会長を議長として第49回日本心理学会開催中に日本大学文理学部で開催された。以降第2回準備委員会が日本心理学会第50回大会会場の名古屋大学教養部で開催され、順次、日本心理学会の年次大会で会合がもたれるといった具合に、準備委員会の活動も本格化していった。Leboyer IAAP 会長の要請をうけて日本心理学会が第22回大会のホストとしての中心的役割を引受けることを決定したのも1986年の5月であった。こうして第22回大会開催へ向けて着々と準備が運んでいった。

1987年12月には「第22回国際応用心理学会議準備会ニ

ューズ」No. 1も発行され、会議のPR活動と組織体制の周知徹底がはかられるようになった。このニュースでは大会を運営する委員会組織が正式に決定、スタートしたことが報告された。準備会の会長に本明寛日本心理学会会長、幹事として三隅二不二・大山正・滝沢武久・長山泰久・糸魚川直祐（敬称略、以下同様）が就任され、実行委員会は委員長三隅二不二、副委員長大山正、実行委員会の下部組織として企画委員会、総務委員会、経理委員会、国際交流委員会、国内広報委員会、国際広報委員会、学術プログラム委員会、国際心理学会連絡委員会などが設けられた。またこれらの委員会とは別に募金委員会も結成され、本明寛委員長、中西信男・山田雄一副委員長を中心に関西地区、東京地区の出版社、企業を対象に募金活動が精力的に開始され出した。日本学術会議と共催で行なわれることになり、資金援助も得られたとはいえ、この種の国際会議で一番問題になるのは大会開催にかかる経費である。参加者からの参加費（日本人5万、外国人4万）では到底まかないきれない。募金委員会では当初目標を6,000万におき途中、難航しながらもどうやら目標に到達することができた。筆者も存知よりの企業をかけ回り学者こじきを振舞ったが、社会科学関係への一般企業の認識は低調であり、利潤に直接結びつかない学会には冷淡であることを思い知らされた。しかしながら、心理学専攻者が活躍している企業や会議のメインテーマ「技術社会と人間」に賛同して頂き、思わぬ多額の募金に応じてくれる所もあり、炎天下、会社訪問をした苦勞が吹きとんだことを何回か味わった。

閑話休題、国際応用心理学会（International Association of Applied Psychology: IAAP）は1920年に設立され、国際心理科学連合（IUPsy S）と並ぶ70年の長

* 立教大学文学部心理学科

Department of Psychology, Faculty of Letters, Rikkyo University

い活動の歴史をもっている。組織心理学, 心理学的アセスメント, 社会開発と心理学, 環境心理学, 教育・教授・学校心理学, コミュニティ並びに臨床心理学, 老年心理学, 健康心理学, 経済心理学の9部門が設置されているが, イスラエルの大会では一般心理学, 社会心理学の発表領域が加わった。京都における会議ではこれらの領域に加えて, 心理学と法, 人間工学, 交通心理学の分野が追加された。

国際応用心理学会では機関誌, Applied Psychology: An International Review を刊行しているが, Vol. 38, Issue 4, (October 1989) で「日本の応用心理学」特集号を組んだ。145頁にのぼる冊子であるが, 目次だけを紹介すると次のようである。

Table 1 Applied Psychology in Japan
(Contents)

Wilpert, B., Foreword
Misumi, J., Introduction: Applied Psychology in Japan
Misumi, J., Research on Leadership and Group Decision in Japanese Organizations
Minami, T. & Wakabayashi, M., Managerial Career Progress in a Japanese Organization: A 13-year Longitudinal Investigation
Tsujioka, B., Psychological Assessment in Japan in These Decades
Namba, S., Psychological Studies on Human Responses to Noise in Japan
Kinoshita, T., Health Psychology in Japan
Ando, N., Community Psychology in Japan: A Historical Review
Fukuhara, M., Counselling Psychology in Japan
Nagatsuka, Y., The Current Situation of Traffic Psychology in Japan
Okamoto, Y., Economic Psychology in Japan

現在の日本の応用心理学全領域を網羅しているとはいえないが, 日本における応用心理学の研究を世界中の応用心理学者に知らしめた貢献は大きい。大会前の短期間でまとめあげた著者たちの努力には敬意を表したい。

開 幕

日本の国際学会の運営は定評のあるところだが, 22回国際応用心理学会議も見事なオープニングセレモニーで始まった。

実はこの会議の前日まで九四日間, 同じ会場で The 3rd International Symposium on Human Factors in

Organizational Design and Management (第3回組織デザインとマネジメントに関する人間工学国際シンポジウム) が開催され, 私も組織委員の一人として初日から参加していたので, 暑い京都にいささかうんざりしていた。けれども国際応心の会議に妻と娘も来京したので気分を一新し, 会場の京都国際会館に向かった。

17時からメイン・ホールで開始された開会式は同志社大学と関西学院大学グリークラブの斉唱, 鈴木バイオリン教室の子供達の演奏, 連獅子の舞い等日本色豊かなプログラムで外国からの参加者からも盛大な拍手を浴びた。続いて行なわれた日本庭園での Welcome Party も飲み物, 食べ物が豊富で同席した日本応用心理学会会長菊池哲彦茨城大学教授と楽しんだ。会場はアルコールと人の熱気でむせ返るばかりであった。

ちなみに今大回の予約登録者はアジア1032名, オセアニア11名, 中近東36名, 北米352名, 中南米20名, アフリカ11名, ヨーロッパ389名, 総計1906名であったという (三隅二不二「第22回国際応用心理学京都会議を終えて」さいころじすと No. 24 による, 以下の数値も同じ)。プログラムの中から主なものを拾ってみると次のようである。

基調講演で最も多かったのが, 組織心理学関係の5つ (Erez, Heller, Hoyos, Porter, Wilpert) で, 以下心理学的アセスメント3 (Matarazzo, Tenopyr, Strokes), 教育・教授・学校心理学3 (d'Ydewalle, Azuma, Kuhl) と続き, あとの部門は2ないし1の講演であった。(Table 2 参照)

Up-to-date で格調高い keynote addresses (各1時間) も国際会議の魅力であるが, 今回の会議の圧巻は117にのぼるシンポジウムであった。筆者自身はそのうちの6~7に参加したにすぎないが, 開催されたシンポジウムを部門別に分類してみると Table 3 のようになり, 最多の組織心理学を筆頭に, 一般心理学, 臨床・コミュニティ心理学, 社会心理学, 心理学的アセスメント, 教育・教授・学校心理学, 環境心理学の各部門が10を超えるシンポジウムを開いたのが目立っている。

組織心理学のシンポジウムが多いのは, 会員数が部門の中で最も多いことにもよっている。その内容は組織構造と文化, リーダーシップと意思決定, 働くことの意味などの領域に大別できるが, 理論的色彩の濃いものから実践的なものまで幅広く広がっていた。

なお, 基調講演やシンポジウムの内容を手短かに, かつ的確に紹介したものが, 京都会議の Scientific Programme Committee の執筆により, IAAP のニュースレターに掲載されている (International Association of

Table 2 基調講演者と講演題目

Speaker	(Country)	Theme
W. Michelson	(Canada)	MAKING ECOLOGY ENVIRONMENTALLY EXPLICIT
G. d' Ydewalle	(Belgium)	IS BRIDGING THE GAP BETWEEN SCHOOL LEARNING AND COGNITIVE SCIENCE APPROACHES ON KNOWLEDGE REPRESENTATION DESIRABLE AND FEASIBLE?
J. B. P. Sinha	(India)	DEVELOPING PSYCHOLOGY AS A POLICY SCIENCE
J. A. Michon	(Netherlands)	UNIFICATION OF TRAFFIC SCIENCE
C. G. Hoyos	(FRG)	OCCUPATIONAL SAFETY
J. D. Matarazzo	(USA)	THE VALIDITY OF PSYCHOLOGICAL ASSESSMENT
M. L. Tenopir	(USA)	EMPLOYMENT RESEARCH IN MULTI-ETHNIC SOCIETIES
R. I. Evans	(USA)	COGNITIVE-PSYCHOLOGICAL-BEHAVIORAL CONCEPTS RELATED TO PREDICTING AND PREVENTING THE USE BY ADOLESCENTS OF TOBACCO, ALCOHOL AND ILLEGAL DRUGS
Y. Amir	(Israel)	RESOLVING INTERGROUP CONFLICTS
K. E. Wärneryd	(Sweden)	THE STUDY OF ECONOMIC BEHAVIOR
D. J. Glencross	(Australia)	HUMAN PERFORMANCE AND HUMAN POTENTIAL
F. A. Heller	(UK)	THE UNDERUTILIZATION OF APPLIED PSYCHOLOGY
A. T. Welford	(UK)	PSYCHOLOGY AND THE STUDY OF AGEING
B. Wilpert	(FRG)	ORGANIZATION-ENVIRONMENT-RELATIONS
G. Kroj	(FRG)	CHANGE OF PERSPECTIVES IN TRAFFIC PSYCHOLOGY
S. R. Graham	(USA)	THERAPY EFFECTIVENESS IN THE FACE OF ETHNIC CHANGES IN THERAPEUTIC COMMUNITY
D. H. Olson	(USA)	FAMILY CIRCUMPLEX MODEL
H. Azuma	(Japan)	TEACHING TO THINK
L. C. Xu	(China)	PSYCHOLOGICAL CONTRIBUTIONS TO THE ECONOMIC AND CULTURAL DEVELOPMENT OF CHINA
C. Hayashi	(Japan)	BELIEF SYSTEMS AND THE WAY OF THINKING OF THE JAPANESE
M. Oshima	(Japan)	TOWARDS THE ERGONOMICS OF JAPAN IN THE FUTURE
E. H. Zube	(USA)	PERSON-LANDSCAPE TRANSACTION
M. Erez	(Israel)	WORK MOTIVATION
J. Kuhl	(FRG)	SELF-REGULATION
G. S. Stokes	(USA)	CLINICAL VS. ACTUARIAL ASSESSMENT
H. S. R. Kao	(Hong Kong)	APPLIED GRAPHONOMICS
J. M. Pioto	(Spain)	CUSTOMER VS. COMPETITOR
L. W. Porter	(USA)	ORIENTATION IN APPLIED PSYCHOLOGY
S. Penrod	(USA)	EMPLOYEE-ORGANIZATION RELATIONSHIPS
		USING PSYCHOLOGICAL RESEARCH TO INFORMAL LEGAL CHANGE

Applied Psychology, Volume 3, Issue 1, April, 1991 Newsletter pp 3-9)。

日本応用心理学会会員がオルガナイザーや司会者となって組まれたシンポジウムも少なくなかったが、そのうちのいくつかをあげてみると次のようである。

太田博雄・松浦常雄「自動車運転者に対する適性検査

の問題」(交通心理学)、松井資夫「集産主義的価値観と作業集団ダイナミックスとの関連性」(組織心理学)、長塚康弘「異種道路使用集団に関する調査と対策」(交通心理学)、鈴木由紀生「アルコールと運転」(交通心理学)、山本多喜司「新しい環境への過渡期」(環境心理学)、長町三生・神代雅晴「高度技術社会におけるスト

Table 3 部門別シンポジウム開催数

部 門	数	部 門	数
組織心理学	16	環境心理学	10
一般心理学	13	健康心理学	6
臨床・コミュニティ心理学	12	経済心理学	6
社会心理学	12	人間工学	5
心理学的アセスメント	11	交通心理学	5
教育・教授・学校心理学	11	心理学と法	4
		心理学と社会開発	3
		老年心理学	3

レスと人間因子」(人間工学), 三浦利章・野口薫「車における視覚」(交通心理学), 岡堂哲雄・佐藤悦子「東洋と西洋における家族問題への心理学的アプローチ」(臨床・コミュニティ心理学), 浜治世「情緒に関する基礎的, 臨床的研究の展望」(一般心理学), 井上枝一郎「システムと環境デザインにおける人間因子」(人間工学)。

このほか本学会会員以外の日本の心理学者や隣接領域の研究者が企画したシンポジウムは数多くあり, それぞれの会場で精力的な討議を展開していたが, Audio-Visual Presentation の分野と環境心理学の部門で八面六臂の動きをされていた日本大学の浅井正昭教授の姿が印象的であった。

映像による発表も12あり, 組織心理学, 健康心理学, 臨床・コミュニティ心理学, 人間工学など幅広くまたがっており, 視聴覚に訴える方法で研究内容を効果的に紹介していた。

個人の研究発表はすべてポスター掲示の形式をとったが, 畳2枚分のスペースを割当てられたので, 写真やグラフをたくさん盛りこめることができ, 発表者思い思いの工夫をこらし, 広い Event Hall もを活況を呈していた。初日から最終日迄の5日間, ホールの掲示板を飾った発表は492にのぼった。責任在席時間は3時間であったが, 関心の薄いテーマの前は閑散としている反面, 写真やグラフの表記法が巧みな研究の前には人だかりがして積極的な討論が交されているのがみられた。筆者はポスター掲示に指定された日が最終日であったので, この種の会議では珍しく最後の日まで会場に居残らざるを得なかった。

国際会議の主目的は, 各国の研究者の最新の研究データにふれ, 自己の研究にそれを摂取・活用しながらも, 自分の研究成果を広く世に問うていくものであることは論をまたない。と同時に, 既知・未知の研究者との交遊を深め, 情報の交換や意思疎通をはかる場であることも

確かである。各部門が公的な部門会議を会期中に会場で開いたり, dinner party を京都の各地で開き, メンバー相互の友好を深めたのもその現れである。私自身も公的・私的にいくつかの会合に出席し, 旧知や未知の人々と交流をもつことができた。その中でも印象に残ったのは, 私が所属する産業・組織心理学会の常任理事のメンバーと IAAP の President Elect となったイリノイ大学の Harry C. Triandis 教授, ミネソタ大学の Richard D. Arvey 教授, 組織・人事診断の専門機関 Personnel Decision Inc の Robert F. Silzer 博士(組織心理学部門のシンポジウム「90年代の経営心理学」のオルガナイザー)らとの合同会食であった。国際交流の盛んになった今日, 外国人も箸の使い方が大変上手になり, 紙エプロンを肩からかけ, 肉を巧みに口に運んでいた姿を思い出す。

そのほか, ベルリンの壁がまだ存在していた頃, 東ベルリンで開催された学会に出席したとき知己を得たフンボルト大学心理学科 F. Klix 教授と再会し, ホテルの食堂でドイツワインを飲みながら, 格安航空券で来日したので腰が痛かったなどの話を聞いたことも忘れ難い。

後 記

『応用心理学研究』編集の仕事から解放され, やれやれと思っていたとき, 村井新編集委員長から“京都の国際応用心理学会議について何か書くように”というお達しがきた。

既述したように, この学会の前に ODAM 国際会議が同一の場所であり, 丸10日間京都に滞在していた。土地の人の話でも, 昨年の京都の暑さは例年になくきびしかったという。ただただ暑かったということが記憶に残り, 基調講演やシンポジウムの内容を思い出そうとしてもさっぱりであった。このような駄文で終わってしまうのを申訳けなく思う。

幸いこの会議で発表された研究内容については, 国際応用心理学会機関誌の編集委員長, Bernhard Wilpert 博士の下で Proceeding 刊行の企画が進められ, 各発表者が本年4月末までに Summary の原稿を送付した。1992年に Lawrence Erlbaum Ass Ltd., London から3巻の論文集が発行される予定になっている。

筆者の拙い研究内容の紹介よりは, この論文集を読まれば, 会議の内容を把握されることができると思う。関心のある方は刊行後に一読されることをおすすめしたい。

なお, この会議に先立って7月19日から21日にかけて15のワークショップが開催されたことも付記しておかね

ばならない。当初26の workshops が企画されていたようであるが、申込者不足や企画者の個人的理由などによりキャンセルされたものが多く、結果的には15にとどまったようである。その大半は臨床心理学関係と組織心理学関係のものであった。

何はともあれ、外国からの参加者からも大好評であった国際応用心理学京都会議が無事に終了したことは同慶のいたりである。長い期間準備に精力的に活動された準備委員会、実行委員会の人々の献身的努力には感謝の意を表したい。